

大分県現代俳句協会句会報 第26号

令和6年12月25日発行

【第一回雑詠句会結果&第二回雑詠句会選句号】

第一回雑詠句会 結果発表（選句&選評）

1 8点 種袋切れれば呼吸をはじめけり 山口 雀昭

1 6点 薄氷を踏む少年の反抗期 時松由美子

1 6点 反骨のかたちには伸びるとろろ汁 立花真由美

1 5点 つばめ来るいつも通りという奇跡 岸本千鶴子

1 3点 人生を笑顔で煮込む去年今年 時松由美子

1 3点 くだびれた柚子を数えるしまい風呂 吉田 素子

1 3点 薄氷の記憶の底にある昭和 足立 攝

1 3点 空箱に春の噂が忍び込む 河野 則子

1 2点 姉の忌の落葉掃いてもまた戻る 足立 攝

1 2点 名を呼ばれわが名が好きになる小春 赤峯 友子

1 2点 初夢というあやふやな舟を漕ぐ 足立 攝

《11点句》

着ぶくれて浮世話が紛れ込む
無口なる夫の存在せき一つ
重体の地球から出る軽い咳

立花真由美
河野 洋子
山口 雀昭

《10点句》

百年を夢見し父の農日記
晩学や回転木馬に春は乗る
寒星がコツンと僕に生きている
諦めも選択肢なるつくづくし
善人の貌して黄泉へゆく霜夜

御手洗豊海
菅 攝子
有村 王志
河野 洋子
赤峯 友子

やわらかな記憶溶かしてゆく初日
夢ひとつポケットに詰め春を待つ
日向ほこ「ポーと生きてて」何故悪い

上田たかし
坂本 一光
山口 雀昭

《9点句》

来し方の足し算引き算臥龍梅

加納 知子

《8点句》

消しゴムの屑の行方や除夜の鐘
名を呼ばれ妻に戻れり初暦
今生の奥へ奥へと木の実落つ
茜さす百万本の霜柱
凧がまちぶせている五番線

河野 則子
足立 町子
赤峯 友子
時松由美子
足立 町子

《7点句》

ゲルニカの愚か幾たび冬北斗
バスの子に手を振る母や能登は雪
ほつほつと恋の予感や冬木の芽

坂本 一光
佐藤 律子
高橋 玲子

《6点句》

崖を嘔む太平洋の冬怒濤

宮川三保子

《6点句つづき》

正月を引つ張つて来て亡き子の墓	河野 輝暉
不器用な男の貌です榎櫃の実	生野 義晴
鳥渡る母の着物を手放せば	神 慶子
春風のパリりとめくる紙の辞書	岸本千鶴子
村老いて木枯ばかり纏れゆく	上田たかし
認知症母の微笑雛の前	山口 雀昭
初日の出距離を保つて夫婦岩	岡村 君香
大きくさめ始発電車の動き出し	桐野 力
日記買う白紙のままに山眠る	平田千代子
こんな夜もひとりの至福葛湯吹く	甲斐加代子
寒牡丹妣は小袖の中にいる	永松左世美
冬の灯をこぼし削がれる村の明日	上田たかし
菜の花の咲く向こうにはお嫁さん	山田 錡一
初点前部屋の数だけある無音	稲田久美子

《5点句》

花曇り米のとき汁見ているやう	山口 雀昭
元日の笑い声失せ震災地	大神 愛子
冬銀河幾何学模様遊びをり	内田トシ子
数え日や宝のように遺影拭く	高橋 玲子
神楽面取ればやさしいパパの顔	稲田久美子
花柄のエプロン新た雑煮かな	志賀 文子
元朝や蒼きまなれ水の星	林 香澄
坑口の脇に冬至が積んである	赤嶺 広史
気は若し屠蘇よりワイン傘寿越え	内田トシ子
鼻歌をひとつ加えてかぶら炊く	天田 泉美
元旦の空やどこかで赤子泣く	神 慶子
日の本の灰汁出しきつて大旦	赤峰佐代子
山国の父は静かな巖です	有村 王志
二類五類どうでも良いと鳥帰る	海神 瑠珂
紅梅が能登によりそう深空かな	白土 正江
水底に魚影水面に散る桜	佐藤 律子

《4点句》

木枯らしの握りしめたる両拳	原田 勝子
明日へのかすかな不安夜の梅	本田 圭子
眠る杜毀さぬように木の実降る	石橋紀公子
オホーツク波頭が春の顔になる	加納 知子
バス停の寒鴉もうバスは無い	立花真由美
ほたる草大きな声ではいえないわ	本田 圭子
凍てる朝お地藏様に茶を供え	佐藤 次江

第一回雑詠句会 作品集(点盛)

今回の第一回雑詠句会にはのべ73名の会員から219句が集まりました。○印の中が採られた得点(点盛)です。年間2回の雑詠句会と自薦作品は、会員なら誰でも無料で投句と選句に参加できます。

1 ⑤花曇り米のとき汁見ているやう	山口 雀昭	19 小春日を両手に浴びて蘇える	菅 登貴子
2 ⑥認知症母の微笑雛の前	山口 雀昭	20 ①駆ける子の頬赤らめて冬の朝	菅 登貴子
3 ⑧種袋切れば呼吸をはじめけり	山口 雀昭	21 ①除夜の鐘最初の音をはたとときく	菅 登貴子
4 女正月母と二人でゆっくりす	小川 良子	22 ②夕立が忸怩の壁を解き放つ	赤嶺 広史
5 ①水仙や見渡す限り海の波	小川 良子	23 ⑤坑口の脇に冬至が積んである	赤嶺 広史
6 ③茶の花の雨を含める白さかな	小川 良子	24 ②落葉踏む音が聞こえる午前四時	赤嶺 広史
7 ①櫂のぼったり赤き日本かな	菅 攝子	25 ①紅白の誰かのあとは除夜の鐘	下司 正昭
8 ⑩晩学や回転木馬に春は乗る	菅 攝子	26 火酒あおるアプレゲエルと平グレと	下司 正昭
9 ④一日を静かに戻る冷奴	菅 攝子	27 ①鳥帰る昭和のマドンナ十井たか子	下司 正昭
10 ②『消音』で観る余部の雪催	岡野 紘宣	28 ①どの雛も父いるはずのすまし顔	牧野 桂一
11 追羽根や空のコートに走り果て	岡野 紘宣	29 ③神遊び子にある初潮父は知らず	牧野 桂一
12 ②椎の実や乳歯一本放り投ぐ	岡野 紘宣	30 ②砲車砲音枯るる間もなき牛の舌	牧野 桂一
13 ⑥崖を噛む太平洋の冬怒濤	宮川三保子	31 ③寒月を見つめて我はジャズを聞く	清家 元幸
14 冬の蝶薄紙のごと羽破れ	宮川三保子	32 ①来る年は良き事あれと晦日蕎麦	清家 元幸
15 ①コーヒ一杯パソコン開く冬のカフェ	宮川三保子	33 風邪などを引く事なきぞ玉子酒	清家 元幸
16 ⑫姉の忌の落葉掃いてもまた戻る	足立 攝	34 ③数え日の遺影に煙草二本あり	早澤まり子
17 ⑫初夢というあやふやな舟を漕ぐ	足立 攝	35 ②茶柱や指に伝わる福沸かし	早澤まり子
18 ⑬薄氷の記憶の底にある昭和	足立 攝	36 草水柱なじんだ指輪誰の手に	早澤まり子
			福田 英子
			猿渡 久子
			菅 攝子
			岡村 君香
			吉田 素子
			生野 義晴
			幸谷 恵子

37 ⑧ 消しゴムの屑の行方や除夜の鐘 河野 則子
 38 ③ 点眼のあとと欠片の望の月 河野 則子
 39 ⑬ 空箱に春の噂が忍び込む 河野 則子
 40 ⑤ 元日の笑い声失せ震災地 大神 愛子
 41 ① カニ食らう娘の手際黙々と 大神 愛子
 42 ① お年玉今年で最後肩軽し 大神 愛子
 43 ⑤ 冬銀河幾何学模様遊びをり 内田トシ子
 44 ⑤ 気は若し履蘇よりワイン傘弄越え 内田トシ子
 45 ⑤ 冴えわたる三十路の吾の越天楽 内田トシ子
 46 ⑤ 冬構えときに頑固な巖もあるかな 有村 王志
 47 ⑩ 寒星がコツンと僕に生きている 有村 王志
 48 ⑤ 山国の父は静かな巖です 有村 王志
 49 ③ どうしよう高いコートに一目惚れ 岡村 君香
 50 ⑥ 初日の出距離を保って夫婦岩 岡村 君香
 51 ④ 春寒や診察室の丸き椅子 岡村 君香
 52 ⑥ 正月を引つ張って来て亡き子の墓 河野 輝暉
 53 ⑤ 名月や宮の廁が待っている 河野 輝暉
 54 ① 独活うどを買いて来て親類が遠くなる 河野 輝暉
 55 ④ 木枯らしの握りしめたる両拳 原田 勝子
 56 ① 新年のハガキに嬉しい添え一言 原田 勝子
 57 ⑤ 桁違い暮れ号外の翔平どん 原田 勝子
 58 ⑤ 限界の集落の穴風の夢 吾亦 紅
 59 ② 麦の芽の大地を割って行軍す 吾亦 紅
 60 ② 逢引きは隣の空き家猫の恋 吾亦 紅
 61 ② 大晦日気持新たに終い風呂 安田 文
 62 ⑤ 軒染めて友に貰いし吊し柿 安田 文
 63 ① 稲架掛けや空き家バンクで活気つく 安田 文
 64 ② 揺れる街垂れた電線虎落笛 藤万 葉
 65 ② 寒いねと言つてトーストにバター 藤万 葉
 66 ① 齋粥注げば椀に野原あり 藤万 葉
 67 ② 追憶の丸い母の背毛糸編む 天田 泉美
 68 ⑤ 鼻歌をひとつ加えてかぶら炊く 天田 泉美

69 ⑤ 守られし命聖夜の産声よ 天田 泉美
 70 ⑪ 着ぶくれて浮世話が紛れ込む 立花真由美
 71 ④ バス停の寒鴉もうバスは無い 立花真由美
 72 ⑩ 反骨のかたち伸びるとろろ汁 立花真由美
 73 ③ 鯛焼き半分こ頭は妻に 桐野 力
 74 ⑥ 大きくさめ始発電車の動き出し 桐野 力
 75 ⑤ 赤きマフラー地下道二気にかげ抜けて 桐野 力
 76 ① 熱燭をぐびとおはこの浪花節 吉田 素子
 77 ⑬ くだびれた袖子を数えるしまい風呂 吉田 素子
 78 ④ 梅林を出て煩惱が目を覚ます 吉田 素子
 79 ⑥ 不器用な男の貌です榎櫃の実 生野 義晴
 80 ⑤ 数え日の為すべきことの焦燥感 生野 義晴
 81 ④ 憤懣を押しつぶすこと落葉踏む 生野 義晴
 82 ① 七五三姉には姉の髪飾り 有永真理子
 83 ⑤ 能登災禍薄明りなき寒の雨 有永真理子
 84 ② 青空へ己を曝す枯木立 有永真理子
 85 ⑤ 数え日や宝のように遺影拭く 高橋 玲子
 86 ② 諍いの仲を取り持つ寒造 高橋 玲子
 87 ⑦ ほつほつと恋の予感や冬木の芽 高橋 玲子
 88 ② 除夜の鐘明日を待たずに友逝けり 川西 達子
 89 ⑤ たくましき未来を絵馬に花八手 川西 達子
 90 ① 時空を生きただ花を見ていたり 川西 達子
 91 ② 元日や地震なの記憶のそとにゐて 幸谷 恵子
 92 ③ 生きること悔い多かりき寒の月 幸谷 恵子
 93 ④ 左義長の火の高さ子の高さ 幸谷 恵子
 94 ① 降りしきる雨を迎えてお茶の花 平田千代子
 95 ⑥ 日記買う白紙のままに山眠る 平田千代子
 96 ② 山峡のさびれし町も花は咲く 平田千代子
 97 ② 鏡餅一日を待たず崩れ落ち 井上 則子
 98 ① 地震の果て夢に出でるは春の景 井上 則子
 99 ⑤ 冬萌えや手はポケットに畦道を 井上 則子
 100 ⑥ 鳥渡る母の着物を手放せば 神 慶子

131 ② 廃農の何もかもが出て行けり 加藤 征孝
 130 ① 一っだけ残せし耕作の管理機かな 加藤 征孝
 129 ② 「ご自由に」ロビーの隅の初暦 田代 直之
 128 ① 朝刊の三面記事の雑煮かな 田代 直之
 127 ③ 冬の川ユニボ操る女子社員 田代 直之
 126 ① 特大の絵馬を提げて待つ初日 石橋紀公子
 125 ① ガラス皿砕けてまたたく冬銀河 石橋紀公子
 124 ④ 眠る杜毀さぬように木の実降る 河野 洋子
 123 ⑩ 諦めも選択肢なるつくづくし 河野 洋子
 122 ① 山深く迷ひ込んだる初音かな 河野 洋子
 121 ① 無口なる夫の存在せき一つ 河野 洋子
 120 ① 煮ごぼうの味加減よし小正月 森山 秀子
 119 ① 杉山に吸はれゆくごと川の霧 森山 秀子
 118 ① 秋風や廃家の庭の瓦礫踏み 森山 秀子
 117 ② 受験月右往左往の祖母おかし 高倉 直人
 116 ① よみがえる母の命日クリスマス 高倉 直人
 115 ② 非日常揺れる能登は元旦に 時松ヤスコ
 114 ① 深呼吸斜光両手に冬木立 時松ヤスコ
 113 ① 鳩が飛ぶ祈りは永久とわに初日の出 時松ヤスコ
 112 ⑧ 茜さす百万本の霜柱 時松由美子
 111 ⑩ 薄氷を踏む少年の反抗期 時松由美子
 110 ⑬ 人生を笑顔で煮込む去年今年 時松由美子
 109 ⑥ 梅蕾ほどの夢まだ持ち続け 甲斐加代子
 108 ⑥ こんな夜もひとりの至福湯吹く 甲斐加代子
 107 ⑥ 薄氷を溶かして左右踏み出せり 甲斐加代子
 106 ④ おしゃべりは妹まかせ夜の雪 本田 圭子
 105 ④ ほたる草大きな声ではいえないわ 本田 圭子
 104 ④ 明日へのかすかな不安夜の梅 本田 圭子
 103 ④ 帰道ふつと淋しくなつて 春 神 慶子
 102 ⑤ 元旦の空やどこかで赤子泣く 神 慶子
 101 ① 元旦の空やどこかで赤子泣く 神 慶子

163 手が震えて字を書ぐのもままならぬ 加藤 征孝
 162 吐く息の白さが語る寒さかな 山田 錚一
 161 風切つて土手を走ればつくしんぼ 山田 錚一
 160 菜の花の咲く向こうにはお嫁さん 山田 錚一
 159 廃校の芒の波や世を写し 安部ユリ子
 158 皺の手で塩梅どうか吊し柿 安部ユリ子
 157 スケジュール暦に頼り去年今年 安部ユリ子
 156 神楽面取ればやさしいパパの顔 稲田久美子
 155 うんちくの後に雑炊やと出る 稲田久美子
 154 初点前部屋の数だけある無音 稲田久美子
 153 鏡には虚像の我や寒鳥 永松左世美
 152 寒牡丹妣は小袖の中にいる 永松左世美
 151 紅葉散るはかなき姿見せばやな 永松左世美
 150 戦ひの無き世を願ひ初点前 安森 範明
 149 春の風邪コロナ禍ではと思ひけり 安森 範明
 148 焼芋の熱あつ感を口にする 安森 範明
 147 名を呼ばれわが名が好きになる小春 赤峯 友子
 146 今生の奥へ奥へと木の実落つ 赤峯 友子
 145 善人の貌して黄泉へゆく霜夜 赤峯 友子
 144 名を呼ばれ妻に戻れり初暦 足立 町子
 143 藪柑子あの日の写真送ります 足立 町子
 142 風がまぢぶせている五番線 足立 町子
 141 春風のパリりとめくる紙の辞書 岸本千鶴子
 140 ポップと菜の花明り両隣 岸本千鶴子
 139 つばめ来るいつも通りという奇跡 岸本千鶴子
 138 黙れラジオバレンティンとついで海神 瑠珂
 137 磯遊びしよ濡れ五年三組は 海神 瑠珂
 136 二類五類どうでも良いと鳥帰る 海神 瑠珂
 135 散り急ぐ山茶花の白女郎塚 菅 勲
 134 蠟梅や謡の声に綻びぬ 菅 勲
 133 故郷は夢はるかなり浮寝鳥 菅 勲
 132 村老いて木枯ばかり纏れゆく 上田たかし

194 ⑥冬の灯をこぼし削られる村の明日 上田たかし
 193 ⑩やわらかな記憶溶かしてゆく初日 上田たかし
 192 明けやらぬまだ暗き空月冴ゆる 佐藤 次江
 191 凍てる朝お地蔵様に茶を供え 佐藤 次江
 190 深々と夫の被りし冬帽子 佐藤 次江
 189 事故死の報八幡様の古狸 福田 英子
 188 悴むやけふも終電熟教師 福田 英子
 187 ④松明のこぼる階きざし修正鬼会 福田 英子
 186 ①能登震災何とかすると受験生 赤峰佐代子
 185 ⑤日の本の灰汁出しきつて大旦 赤峰佐代子
 184 ①もぐら打つ声も揃いて学童園 赤峰佐代子
 183 ⑩百年を夢見し父の農日記 御手洗豊海
 182 ③ねじり花ねじり野にある風を呼ぶ 御手洗豊海
 181 ②声かけにだまり返しは咳一つ 御手洗豊海
 180 ③餅を焼く夫は童顔平らな日 鎌倉真由美
 179 ②火照る夜はのっぺらぼうに雪女郎 鎌倉真由美
 178 掛取りをのぞき見する娘ちぢれ髪 鎌倉真由美
 177 立春や仮寝の日々はいつ終わる 白土 正江
 176 玄関に柀挿して意思表示 白土 正江
 175 ⑤紅梅が能登によりそう深空かな 白土 正江
 174 ⑤花柄のエプロン新た雑煮かな 志賀 文子
 173 ①木の葉舞う弟手振る曲り角 志賀 文子
 172 ①冬うらら感會うれし美術館 志賀 文子
 171 ①半島のゆうひ集まる寒さかな 松廣 李子
 170 ③ころろん小春の弾む賽銭箱 松廣 李子
 169 ①足形に規則止しくマスクマスク 松廣 李子
 168 ⑦ゲルニカの愚か幾たび冬北斗 坂本 一光
 167 ①絶望も希望も虚妄遠い春 坂本 一光
 166 ⑩夢ひとつポケットに詰め春を待つ 坂本 一光
 165 ③湯気を立て笑顔引き出すぶり大根 岡野 成美
 164 焼き網のサザエ囲んで初日の出 岡野 成美

219 能登の海大地引き揚げ魂落とす 岡野 成美
 218 幼年の昭和のつら探しけり 大村 和代
 217 ①龍雲の眼光のごと初日の出 大村 和代
 216 ③境内に忘れ物なり雪うさぎ 大村 和代
 215 ⑤元朝や蒼きままなれ水の星 林 香澄
 214 ①春寒や地球絡めしWEBの糸 林 香澄
 213 ①凍る滝刻の止まりし素顔なり 林 香澄
 212 ⑦バスの子に手を振る母や能登は雪 佐藤 律子
 211 ①庭先にシャベルきんかんの実に雨 佐藤 律子
 210 ⑤水底に魚影水面に散る桜 佐藤 律子
 209 ④オホーツク波頭が春の顔になる 加納 知子
 208 佐保姫の裳裾ぬらさんゆばりして 加納 知子
 207 ⑨来し方の足し算引き算臥龍梅 加納 知子
 206 ①うつし世の能登震撼すしめ飾り 國廣 精善
 205 ③湯けむりに匂ふ大根地獄蒸し 國廣 精善
 204 鱈しゃぶをすくう食卓はしゃぐ声 國廣 精善
 203 ⑪重体の地球から出る軽い咳 山口 雀昭
 202 大寒や神社の手水龍の口 山口 雀昭
 201 ⑩日回ぼこ「ボ」と生きて「何故悪い山口 雀昭
 200 ②高原の春みえかくれ三俣山 安部スエノ
 199 早二月事多しなり腰重し 安部スエノ
 198 スマホにて早目の春を友くれし 安部スエノ
 197 ①ウアウアミと猫に春眠じやまされる 猿渡 久子
 196 ④初孫の小さき雛も11才 猿渡 久子
 195 やつてみることを選べと卒業式 猿渡 久子

（おことわり）
 投句の中で山口雀昭さんの作品が一番初めと末尾に近い部分の二ヶ所にあることが集計後に分かりましたが、そのままの編集になっています。

第一回雑詠句会・選&選評

◆到着順◆

第一回雑詠句会作品219句を、会員会員外を合わせて73名の選者で選句しました。2名の会員がご自分の作品を選句していただきましたので、事務局で集計から除きました。これは故意でなく、投句と選句の時期が離れたため、ご自分の作品を忘れてしまったせいだと思われれます。

辞書も電子辞書やスマホで簡単に調べることが出来る現在です。下五の紙の辞書を、春風がめくると言う作者の視点が利いています。

足立 鶴男 選

《8・32・37・40・77・94・134・154・209・218》
40元日の笑い声失せ震災地

(大神 愛子)

今だに復興出来ない能登地震。くる年もまた寒い冬をすごすのかと思えば辛くなる。我々も何時来るか分からない南海トラフの近県に住むものだから人ごととは思えない。

早澤まり子 選

《16・17・21・47・52・55・81・109・150・175》
109 人生を笑顔で煮込む去年今年

(時松由美子)

一言で人生と言うけれど、長い歴史の積み重ねだと思えます。社会に対する不満、あちこちの戦争も腹の立つ事です。今までのいやな思い出、あの人のいやな思い出、きりがありません。そんな事をみんなひっくるめて笑顔で過せたら幸せな人生と言えるのではないのでしょうか。自分もそうありたいと願います。

宮川三保子 選

《29・43・61・78・123・138・154・159・190・207》
154 春風のバラリとめくる紙の辞書

(岸本千鶴子)

清末ヤヨイ 選

《55・71・73・85・135・167・177・197・211・213》

佐藤 優美 選

《49・60・67・104・123・151・170・207・217・218》
104 ほたる草大きな声ではいえないわ

(本田 圭子)

私はもともと内緒話や人の陰口を言うのは、きらいである。でも自分自身のことは、大きな声で言えない過去があった。でも教会に通い心の痛む過去を語り終えたとき、もうその過去は「大きな声でいえないわ」というものではなくなった。誰か他人の人生のように話すことができるようになったのである。

作者の「大きな声でいえない」というのは一体どういうことなのか。自身のことと考えて何か感じさせてくれる句である。

新志 光夫 選

《17・37・81・110・121・123・150・153・154・190》
17 初夢というあやふやな舟を漕ぐ

(足立 攝)

一年の初めに見る初夢なるものは、信じてはみたい。ただ、経験上あてにならないものだ、と言う事も分かっている。句の流れもいいし初夢という季語の本質が巧みに表現されて、良い句です。

5

古後 粒勝 選

《8・39・43・68・72・93・101・192・202・213》
202 バスの子に手を振る母や能登は雪
(佐藤 律子)

寒い朝、登校するバスの子に手を振りながら
送り出します。そんな日常と能登の自然災害を
取り合わせました。
作者の心情が心に広がります。

本田 圭子 選

《3・16・31・81・82・95・100・107・192・207》

神 慶子 選

《17・47・93・104・140・148・173・178・189・211》
211 重体の地球から出る軽い咳
(山口 雀昭)

地球温暖化が叫ばれて久しい、それに止まぬ
戦火。ニュースを最後まで直視出来ない事象に
時には絶望的になってしまふ。こんな私達を許
し養ってきてくれた地球がもう限界にきている
のではと気付かされ共感できる一句でした。

永松左世美 選

《18・49・51・70・110・121・156・173・199・218》
199 元朝や蒼きままなれ水の星
(林 香澄)

壮大なスケールの句ですね。「蒼きままなれ」
の中七がすてきです。

山本 悦子 選

《3・16・34・39・47・72・84・111・141・175》

高野小百合 選

《3・8・47・71・92・95・110・134・139・158》
139 神楽面取ればやさしいパパの顔
(稲田久美子)

この句は、素直な俳句だと思います。神楽
の踊りは、血気盛んで勢いがあります。そのお
面を取れば、いつもの「やさしいパパの顔」が
あるという、ひとつの発見であり、暖かい家族
愛を、この俳句に読み取りました。

大神 愛子 選

《2・31・61・117・121・148・156・167・202・213》
61 大晦日気持新たに終い風呂
(安田 文)

一年間の出来事など思い乍ら「ああ今年も終つ
たな」「明日は新年」、一年の計画や家内安全
など思い乍ら終い風呂に入った作者の気持が私
とダブって見えるこの句が大好きです。

河野 輝暉 選

《30・37・48・51・72・100・123・141・148・156》
156 つばめ来るいつも通りという奇跡
(岸本千鶴子)

「お前が歩いていると思うな」と或る僧に言
われ、「意味が分かりませんが」と面くらって
尋ねると「お釈迦様が歩かせてくれてるんだ」
との返事。「いつも通り」の帰燕現象に神秘性
を感じたのだ。一年たつて同じ燕が遙か海を
渡つてよくも吾が巢を記憶しているなどの感心
と謎を当句は喚起させる。「臆(やが)て死す
べき身の今ここに在るは有難し」(法句経)。
平凡の中に隠れている非凡の発見こそ作句の真

髓と気付かせてくれる掲句は有難し。

内田トシ子 選

《17・47・64・77・79・90・124・151・179・207》
90 時空を生きたただ花を見ていたり
(川西 達子)

晩年になると、美しい花、心に浸みる音楽、
感動を呼ぶ文章に囲まれていたいと、自分も切
に願うようになります。この句からは穏やかな
情景と佳い香りがしました。

坂本 一光 選

《6・18・72・84・95・131・148・149・150・199》
131 廃農の何もかもが出て行けり
(加藤 征孝)

何もかも「何」は何だろう。想いをかき立
てる何かがある句。私ごとで恐縮だが、数年前
にはじめて大分県現代俳句大会に初投句して小
さな賞をいただいた句を思い出した。

ヘイタイもコメもデンキも出して過疎
「廃農の」句の方がはるかにふくらみがあると
想いました。

豊國 隆信 選

《9・17・28・65・72・95・109・110・204・211》
204 水底に魚影水面に散る桜
(佐藤 律子)

水底の魚影と水面に散る桜という対比したふ
たつの情景が、俳句というキャンパスのなかで
見事に溶け合い新たな情景をつくっている。読
み返すたびに、静かな時間の流れも感じとれる。
句割れというツールが活かしている。

藤万葉選

《1・41・70・101・110・135・148・156・183・203》
101 元旦の空やどこかで赤子泣く
(神 慶子)

元旦に能登を襲った地震。どこからか赤ん坊の泣き声がある。弱い者に災難はより大きなものとなる。作者の弱者に向けた優しさを感じます。戦禍の国で泣く赤子の声にも聞こえます。宇多喜代子の「短夜の赤子よもつともつと泣け」を思い出しました。

安部ユリ子選

《1・39・52・68・95・109・123・164・165・175》

高橋 玲子選

《3・9・16・48・79・110・148・156・175・199》
148 名を呼ばれわが名が好きになる小春
(赤峯 友子)

掲句を読んで若き現役が懐かしく蘇った。

いつも上司は「高橋さん」と呼ばれていたのにレクリエーションで「玲子ちゃん」と呼ばれびつくり仰天。自分の名前が好きになり、ほろ苦き恋も経験。作者もきつと何か幸せな出来事があったに違いない。そして両親に感謝したことでしよう。

川畑英里花選

《10・17・47・70・71・85・149・154・207・211》
211 重体の地球から出る軽い咳
(山口 雀昭)

痛めつけられて地球は重体だ。たまに震えが

くるが、大方はじつと我慢している。しかし耳を澄ませると弱々しく咳をしている。ふと、拾った野良犬を思い出した。獣医が「1年はもたない」という程、進行したフィラリア病に感染していた。最初はすぐく元気だったがコンコンと軽い咳をし始めた。しだいに元気もなくなつた。ある一晚中咳を続けた朝、犬は冷たくなつて空へいった。あの軽い咳の音を忘れられない。どんなに苦しかったのだろう。

御手洗豊海選

《13・50・70・72・76・87・110・138・192・207》

安田 文選

《1・3・8・87・101・115・136・149・165・188》

牧野 桂一選

《3・17・55・72・110・141・149・164・176・204》
3 種袋切れば呼吸をはじめけり
(山口 雀昭)

種袋は草花の種を入れる封筒である。その種袋を種屋さんで見かけると春を実感する。その種袋を切って開けるとその瞬間種が呼吸を始める。その発見がこの句の感動。それを「呼吸をはじめけり」という文語の表現が支えている。特に「けり」には俳句の伝統的表現の力を感じる。この句は、内容と文体が統一されている。また、よく見かける「種袋を振る」を「種袋切れば」として見るところにも新鮮さを感じる。

田原 夏子選

《13・16・24・29・40・96・114・138・165・170》

丘 友子選

《15・18・30・77・121・123・137・164・188・192》
30 砲車砲音枯るる間もなき牛の舌
(牧野 桂一)

日出生台であろうか。周辺の家畜農家は、毎年のように実弾演習に曝され、その規模はだんだんと拡大されている。中七の「枯るる間もなき」が牛の舌の渴く間もないほど立て続けに演習が行われている様子が実感として伝わってくる。牛の悲鳴が聞こえてきそうな胸の痛む句である。

河野 洋子選

《13・18・37・39・68・70・125・150・154・211》

井上 則子選

《3・50・77・107・121・143・163・202・213》
77 くれたびれた柚子を数えるしまい風呂
(吉田 素子)

少しやわらかくなつてしまった柚子だけど、ゆつくり浸れるしまい風呂。まだまだ残っている香を楽しみながら……。
「くれたびれた柚子」を句材にされたこと、感服しました。

高倉 直人選

《3・72・74・92・110・133・151・170・204・211》
211 重体の地球から出る軽い咳
(山口 雀昭)

PM2.5や黄砂、戦争による瓦礫や兵器の残骸、フロンガスによるオゾン層の破壊等で地球

そのものが重体化してきている。

特にオゾン層の破壊により紫外線量が増大し我々の身体に悪影響を与えているし、年々地球の体温が上昇し続けている。軽い症状のうちに治療を施さないと大変なことになることは明らかである。この句が発している警告を地球に住む我々が真摯に受け止めなければならぬと強く感じさせられた。

福田 英子 選

≪8・38・74・79・107・120・123・148・149・156≫

菅 勲 選

≪5・39・52・59・92・93・97・110・139・193≫
93左義長の火の高さ子の高さ

(幸谷 恵子)

県南の方では、どんど焼きと云っています。正月の行事ですが、火の高さと子の高さに将来の希望がかいまみれます。

天田 泉美 選

≪17・38・48・143・150・153・163・177・191・205≫
38点眼のあとは欠片の望の月

(河野 則子)

一日を終わり、今日は仲秋の名月と、虫の音や夜風といつしよに名月を愛でている作者でしようか。穏やかにある風景は、ひとときのやすらぎを感じます。「今日も無事に終わった」と安堵しながらいつもの眼薬をさす。眼薬で満たされた眼で観る名月は、きらきらと小さな欠片のように輝いているのでしよう。「点眼のあとは欠片」としながらも、名月はやはり大らかに優し

く季節の中にあるんだなあと感じた一句です。

立花真由美 選

≪3・22・34・52・135・142・148・150・158・207≫
158磯遊びしよ濡れ五年三組は

(海神 瑠珂)

児童ではなく教師の目線で詠まれたと想像してみました。びしょ濡れになるまで児童に思う存分磯遊をさせしつかり見守っている教師のやさしい視線と下句「は」に他のクラスの指導とは違うぞ!という自負がうかがえます。昭和の学校行事の一コマでしょう。「危険」「汚れる」の体験は子供を育むのに必要です。今の学校行事はすっかり萎縮してしまいましたが……。

石橋紀公子 選

≪16・47・72・78・100・143・148・149・151・153≫
151名を呼ばれ妻に戻れり初暦

(足立 町子)

年末年始と主婦はとにかく多忙です。大掃除、買い物、餅つき・おせち、帰省子家族の布団の事、孫達のお年玉準備、等々休む間などありません。掲句からは、そんな中のほんの息抜きの瞬間を切り取ったものと拝察します。夫から「○○お疲れ様」とでもねぎらいの言葉が掛けられたのでしようか?「妻に戻り」の措辞にやさしい夫婦の時間が流れている様子が伝わってきました。良い句です。

時松ヤスコ 選

≪44・88・110・121・136・154・184・185・186・199≫

生野 義晴 選

≪2・16・24・40・51・87・124・170・183・209≫
16姉の忌の落葉掃いてもまた戻る

(足立 攝)

作者にとって故人となられた姉の存在は、生前と変わらぬ心情に満ち充ちているのでしよう。その追慕の念を、中七下五の表記によってさりげなく見事に表現されていると思いました。哀しみも喜びも姉妹して共有されていたんだろうと推察しました。
遺された作者には、いつ何時もお姉様の笑顔や思い出が蘇ることだろうと思います。金の思いは、これからも色褪せることなく作者の背を押してくれることではしよう。

安森 範明 選

≪13・20・27・40・50・71・129・139・184・≫

諸富 幹夫 選

≪17・31・35・55・77・109・136・167・209・213≫

加藤 征孝 選

≪8・44・63・77・98・104・135・187・204・205≫

小野みち子 選

≪3・17・18・39・47・70・72・123・140・176≫

安部スエノ 選

≪40・49・67・117・134・137・165・175・184・192≫
117受験月右往左往の祖母おかし

(高倉 直人)

受験を控えてがんばっているお孫さんを心配

して、居ても立ってもいられない、おばあちゃんの様子が目にみえるようです。その様子をありがたくやさしく見ている作者の気持が伝わり大好きな句です。

甲斐加代子 選

《18・50・111・143・151・163・164・172・192・207》
111 茜さす百万本の霜柱
(時松由美子)

作者の住む高原は海拔800mの冬の厳しさは、格別。その中でこそ見れる霜柱は、一瞬の光景です。然も茜がさしていた素晴らしい美しさ、百万本と表現した感性はやはり永年の、キャリアの証、流石です。

林 香澄 選

《72・74・110・126・151・156・157・159・161・211》
72 反骨のかたちに伸びるとろろ汁
(立花真由美)

とろろ汁で一句詠みたいと願っています。その間に次々と名句が現れ、これもその一つです。反骨のかたちに伸びるですって！あの色のとろろ汁が。その通りその通りという感じです。

河野 則子 選

《50・54・59・72・77・95・128・175・184・211》
77 ぐたびれた柚子を数えるしまい風呂
(吉田 素子)

冬至の日に「中風」予防のために、南瓜を食し、更に風呂に柚子を浮かべる風習がある。

新鮮な柚子を作者が家族の健康を願いながら浮かべた柚子は自分がある仕舞風呂の頃には

「気」を吸いとられたのか柚子のくたくたになつた姿に哀れを感じた。「数える」に作者のユーモアが底流になり、印象深い余韻を残した秀句と思う。

白土 正江 選

《10・17・22・23・37・78・103・150・153・173》
78 梅林を出て煩惱が目を覚ます
(吉田 素子)

心配事があってこもっていたが、梅見に誘われて出かけることにした。梅見は楽しくて梅の花にみとれ香りに酔っていたが、梅林を出てから、梅の花の映像と香りが脳に深く残り忘れていた心配事への執着の気持ちがわいてきた。今帰宅の途中であるが、この執着の気持ちをどうしたものか。私の心は一層悩ましくこの煩惱にふりまわされている。

幸谷 恵子 選

《39・68・72・109・110・131・153・190・192・214》
192 夢ひとつポケットに詰め春を待つ
(坂本 一光)

ポケットにしまっておきたい夢は何でしょう。春は出発の朝のことでしょうか。静かにその大切な時が来るのを待っている姿が想像されます。

吉田 素子 選

《13・23・39・48・87・110・150・163・165・167》
13 崖を嘔む太平洋の冬怒涛
(宮川三保子)

この句に出会ってすぐ、太平洋の石廊崎の風景が目につかびました。断崖絶壁に突出した石

廊崎の岬を、ゴジラのような大荒波が襲いかかってくる冬の海、荘厳なまでに美しい自然。

吉光 好美 選

《1・43・73・74・109・111・192・202・204・213》

佐々木 玉 選

《2・3・17・18・39・70・77・127・149・173》
127 冬の川ユニボ操る女子社員
(田代 直之)

女性の活躍する場所が冬の川でユニボを動かすとは恰好いいですね。「女子社員」がちよつと硬いかなと思いましたが、目を引く俳句でした。

松廣 李子 選

《3・18・60・70・143・153・198・202・211・213》
202 バスの子に手を振る母や能登は雪
(佐藤 律子)

切れ字「や」の詠嘆から下五の「能登は雪」、母の切ない気持ちが強調されて涙まで見えてきそうです。

大村 和代 選

《3・35・72・97・109・156・175・183・188・208》

薬師寺裕二 選

《2・8・29・43・87・88・93・100・124・127》
124 眠る杜毀さぬように木の実降る
(石橋紀公子)

「眠る杜」に対して「壊さぬように」と表現したフレーズに感銘を受ける。また、「木の実

降る」との配合が、晩秋の「眠る杜」の感性に
共鳴。

赤嶺 広史 選

《18・47・51・70・78・127・152・153・156・163》

鎌倉真由美 選

《9・23・37・47・72・79・101・123・156・159》
79 不器用な男の貌です榎櫃の実

(生野 義晴)

固いゴツゴツとした榎櫃の実は、なるほど男
の貌ですね。顔ではなく貌を用いたことも良かつ
たと思います。

ふっと寅さんこと、渥美清さんを思い浮べて
います。不器用な男性は温い。そう思うのは昭
和生まれのせいでしょうか。榎櫃の実を見る度
に、この一句を想い出すことでしょう。

田代 直之 選

《3・8・16・18・25・39・85・109・121・163》
25 紅白の誰かのあとは除夜の鐘

(下司 正昭)

紅白歌合戦は、昭和59年までは80%前後
の高視聴率番組で国民の多くが年越しとともに
この番組を見ていた。私もその一人である。私
がこの句で感銘したのは中句の「誰かのあとは」
である。詠み手は勝手に想像させられる。また
紅白がら除夜の鐘へと経過している時間の流れ
(時間軸)がきつちりと伝わって来て心地良い
「今年の大トリは誰かな」と期待しながら新年
を心待ちにしている作者が目に見えかたきま

佐藤 律子 選

《12・64・74・102・103・110・129・135・156・198》

岡村 君香 選

《3・39・44・109・111・121・140・156・193・213》
3 種袋切れば呼吸をはじめけり

(山口 雀昭)

野菜や花の種袋。沈黙を保っていたものが封
を切ることで生き生きと呼吸をはじめ。種袋
と共に、これから植え付けを始める人もウキウ
キと浮き立っている気配が伝わってきました。

上田たかし 選

《23・52・72・77・143・150・159・173・190・205》
205 オホーツク波頭が春の顔になる

(加納 知子)

オホーツク海から打寄せて来る、波頭の綿密
な観察の結果が、四季の変化をうまく描写され
た。北国の人々の春への強い思いが、見事に表
現されている。

下司 正昭 選

《3・18・37・43・103・111・141・164・179・190》
18 薄氷の記憶の底にある昭和

(足立 攝)

昭和の時代に生まれ育った我々世代にとって、
昭和の思い出は一生忘れられないものと思い、
この句に感銘を受けました。

森山 秀子 選

《8・18・38・39・44・70・77・109・155・205》

時松由美子 選

《2・44・68・107・174・175・183・184・193・202》
174 もぐら打つ声も揃いて学童園

(赤峰佐代子)

もぐら打ちはとつてもなつかしく子供のころ
を思い出します。私のところでは、もぐら打は
十四日といって「無病息災と五穀豊穰」を願っ
て子供たちが声をそろえてもぐらが出る所を打
ちます。小豆めしは十五日、成人式、どんど焼
は九重町で十五日、珍珠町は一日おそくて昔は
そんな事を口ずさみながら、どんど焼は小正月
もむかえました、今頃もやっているとところがな
つかしくてこの句をいただきました。ありがと
うございました。

志賀 文子 選

《16・42・56・109・111・112・113・114・165・214》
111 茜さす百万本の霜柱

(時松由美子)

晴れに寒い朝の陽にガラスのような霜畳に光
が映えて、いろんな色を醸し出している光景が
浮かびます。

川西 達子 選

《65・79・107・148・175・192・199・200・211・213》
199 元朝や蒼きまなれ水の星

(林 香澄)

「地球は青かった」この言葉はロシアのユー
リ・ガガーリンが1961年、人類初の宇宙旅
行に行った際に残した名言です。地球が青く美
しい星であることを初めて教えてくれました。

今、あちこちの国や地域で戦争、紛争が絶え

ません。平和は人類の願いです。「蒼きまななれ水の星」、共感していただきました。

赤峰佐代子 選

《2・3・66・86・107・123・139・165・183・213》

赤峯 友子 選

《16・73・79・85・86・110・151・152・207・211》
211 重体の地球から出る軽い咳
(山口 雀昭)

地球温暖化で地球は悲鳴をあげている。世界中で異常気象が起こり、干ばつや台風、洪水などの自然災害が増えている。重体の地球から軽い咳が出ているという。病んだ地球はこのままでは死んでしまうかもしれないという危機を感じる。(今年の夏も異常に暑かった。今だに厳しい残暑が続いている。)

竹石 末子 選

《13・18・77・96・109・111・130・156・164・165》
77 くれたびれた柚子を数えるしまい風呂
(吉田 素子)

くれたびれた柚子の様子が目に浮かびます。しまひ風呂のゆつくりさがわかります。

有永真理子 選

《3・34・48・91・121・148・149・153・159・178》
178 餅を焼く夫は童顔平らな日
(鎌倉真由美)

今時、餅を焼くのはレンジかオーブントースターでしょうか。でもこの句からは、ひと昔前

の火鉢でゆったりと餅を焼く男性の、口元には微笑を浮かべている姿が目につかびます。なんていうことのないありふれたひと日を「平らな日」と表記している。庶民のありふれたしかし、絶対失ってはいけぬ平穏な暮しが描かれています。

足立 町子 選

《6・12・16・23・77・100・150・157・190・218》
100 鳥渡る母の着物を手放せば
(神 慶子)

季語としての渡り鳥は秋に日本に来る冬鳥のこと、雁、鴨、白鳥などの水鳥たちだ。なぜ母の着物を手放すのが今のこの季節になってしまったのか、それは私が母のいっばい詰まっ

令和六年第2回雑詠句会 選句用作品集

た思い出、いや母を捨てられなかったから。毎先に延ばして母と一緒にいたかった。子供の私にとって着物姿の母は自慢だった。親戚の結婚式の母、PTAの時の母。いつも着物だった。着物を手放すことと鳥が渡ってくることとの間に因果関係はないのだが、いかにもありそうな表記が私の母への思いを深くしている。

佐藤 次江 選

《81・119・121・139・141・156・160・192・198・202》

※作品番号は、選句の際にはシャッフルされていきますので、本誌掲載の際、事務局で作者別に変換して振り直しています。

- 1 人生の端に来ていて寒の月
- 2 かなかなや唄い尽くせず繭の中
- 3 山羊乳に時はるかなり夏木立
- 4 八朔やどの黄色とも違う色
- 5 にわか雨軒先借りて虹を見る
- 6 立ち止まりこの夕焼けを一人占め
- 7 爪紅やもう帰らないロバのパン
- 8 産み立ての卵の温み終戦日
- 9 夏の月地球横目で不安顔
- 10 天の川親を探してはぐれ猫
- 11 弾薬庫睨む背高泡立草
- 12 稲の波ふと呼び醒ます詩ごころ
- 13 捨案山子労つてるし村雀

- 14 春昼や母につながれ黒電話
- 15 酷暑ゆえ新札我家を避けており
- 16 毎年はいつかは終る藤寝椅子
- 17 雑草の上に横たふ蛇の虚から
- 18 かき揚げの牛蒡の産地はフィリッピン
- 19 亡き夫愛した石楠花つぼみかたし
- 20 ごみ袋も生の一部や盆の月
- 21 有明の月に誓うや亡夫ひとり
- 22 空の底抜けて雨乞い死語となる
- 23 夜学子や母が背を押すにぎりめし
- 24 裸の子やっぱりママのひざが好き
- 25 流灯会万歳の手は何処へ
- 26 生ビールおつかれ様と笑う泡

27 秋立つや虚子の顔して土手に座す
28 鳴くもよし鳴かぬもともに虫の闇
29 汗かいて汗かいてこそ一生涯
30 蓑虫の糸の一本村に老い
31 天守閣目差す勢ひ蛇の衣
32 転生欄に蛭蛸もあり丸をする
33 嫁姑なごむ日もあり葛の花
34 軌道車のブレーキ音や啄木忌
35 かしましく鳴く蟬もまた地にかえる
36 初恋がまた騒ぎだす十三夜
37 遠ざかる靴音夏帯に移り香
38 新盆をもてなす旧家の代替わり
39 秋暑し疑心暗鬼の米騒動
40 八月や知覧めざすか早田ひな
41 八十路坂登りの恋路秋惜しむ
42 平和とて一期一会夜わの月
43 うかつにも潤目鰯と目を合わす
44 晩夏なり葉はさみしままの本
45 秋茄子を好むほどよき間柄
46 震災の新聞を読む冬の蟻
47 八月の父いつもより気難し
48 幾千夏スフィンクスの太き爪
49 見上げれば古希の秋空刹那なり
50 横たわる筈に山女魚のひとり言
51 また一つ更地の増えし墓参かな
52 萩に会うはじめは小さき風の道
53 一風に生きた心地の田草取り
54 納得の胸にストンと心太
55 父との縁うすかりし墓参かな
56 妻となり母となり果て草の花
57 来客や膝崩せよと夜の秋
58 夕焼やしやがむ母の背かけ込む子

59 二本目は一人で持つよ初花火
60 反戦の合図でしようか柿熟るる
61 ネオンよりパセリが一つ狩行逝く
62 川に出て釣瓶落しをいとをしむ
63 よろめければ影もよろめくどんぐり独楽
64 山里の祭り^{しんがり}殿花火咲く
65 緑蔭に言葉生まれるまで座る
66 亡き姑^{はは}にバトン渡され盆の月
67 星の数ほどのあれこれ母の夏
68 思い出のまたひとつ消え夏に入る
69 木花咲耶姫が舞い降りてより青田
70 「かあさん」の声にふりむく秋彼岸
71 C T・転移無くクラス会臨みたし
72 終活や大樹を伐って涼むかな
73 無花果のとんがる匂ひまだ子供
74 浮人形遠く来ている母の唄
75 伝言を刈田に聞くや祖父の顔
76 東京にもモミジ色づく溪谷が
77 踏み出せばそこにひまわり母の郷
78 蓼の花わが半生は風の中
79 心に刺さる言の葉や薔薇に棘
80 湯あみ終えあおぐ山並月涼し
81 初めてのタバコは昭和夏の雲
82 白桔梗遺影の中に生くわが娘
83 礼拝に向かふ坂道秋の薔薇
84 花サフラン嬉しい時に出る涙
85 言い返す言葉飲み込み蜜柑むく
86 出来過ぎの隣りのトマトはち切れる
87 敗戦忌生きてる者は爪を切る
88 光る君へ現を抜かす良夜かな
89 デザートのカット西瓜の種も食む
90 流星を探し求めて首痛し

91 追うことも逃げるも知恵や油虫
92 秋蛸ちよつと赤めのルージュかな
93 口実に過ぎぬ自衛と知った夏
94 朝顔や今日だけの顔競い合ふ
95 悔やんでも泣いても足りぬ終戦忌
96 星月夜カンパネラの濡れた髪
97 月涼し空のリンクに癒されて
98 美しきひかりの殺意蜘蛛の糸
99 老いてなお生きる気力の稲を刈る
100 ネットよりつまり絵手紙月涼し
101 弁当の輪ゴムを飛ばす夏の果
102 雲の峰棚田は天に行き止る
103 性欄に三択のあり秋茜
104 青栗や少年いつも伏し目がち
105 つくばいの月の棲家となりけり
106 欄干の声ひそかなり遠花火
107 さやけしや白きうなじの束ね髪
108 埋もれし骨片の哭く原爆忌
109 修行僧となりて梅干し並びおり
110 河原ゆく老人ひとり秋の翳
111 朝顔や初の一輪パリ五輪
112 頬染めて割れてなるかと椿の実
113 鶯や炎天の空吹き渡る
114 つつかれて現世にもどる梅雨の蝶
115 草いきれ草刈る人も飛ぶ虫も
116 峽もみじ真赤に染まるまでの夢
117 沸点を超えて地球の涙雨
118 梯梧咲くおじいの背に残る傷
119 十三夜言い負けること覚えたり
120 遥かなる風車の回る秋の空
121 星月夜渡り廊下のきしむ音
122 じゃんけんで三段上がる秋祭り

令和6年度『自薦作品』 Ⅱ 作品募集Ⅱ

※大分県現代俳句協会では、内部の勉強会として年三回の通信句会を開催しています。今回募集する「自薦作品」はその中の一つで、会員なら誰でも無料で応募できます。（投句できるのは会員だけです）
 ※一人四句。この勉強会に未発表のもので、なるべく当季（今ごろの季節）のものをご応募ください。
 ※この制度は勉強のためあるので、昔の作品を「他会員に問う」というものでも構いません。
 ※作品は自動的に「年間一句賞」の対象になります。（年間一句賞は総会で表彰します）
 ※締切は一月二十四日（金）です。年間一句賞の選考委員に送らなければならぬので、早めの投句にご協力ください。選考委員は総会で決定した河野輝暉顧問、有村王志会長、河野則子副会長の三氏。
 ※送り先は事務局（〒879-7151大分県豊後大野市三重町西泉436足立攝方 FAX 0974-22-3749）
 ※同封のFAX用紙でお近くの「コンビニ」からお送りくださると便利です。送り方は「コンビニ」におたずねください。その他、郵送やメールなど、読めさえすれば形式にはこだわりません。

139 138 137 136 135 134 133 132 131 130 129 128 127 126 125 124 123
 柿落葉掃けばふるさと空っぽに
 草取りて生涯現役白寿の手
 短夜や不在着信一つあり
 鬼灯やふと魂合へば母のこゑ
 後悔を奥歯で潰し夏の雲
 一陣の風の連れ去る残暑かな
 水打つも昨日も今日も人の来ず
 入道雲ゴジラの曲で登場す
 行く夏の声を溜めてる廃校舎
 西日落つ島の戦跡みな仏
 鏡台に傷の鮎色秋彼岸
 天高し消してはならぬ好奇心
 迎え灯を灯して消して盆が行く
 盆の客に交じりて夫も義母もいる
 逢いたくて線香花火パチパチと
 出がらしにもやれることあり梅雨の明け
 段畑に人影のあり初蛩

155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145 144 143 142 141 140
 ひらがなで語る八月青い空
 雲ゆたり残暑は去ると告げていく
 何時迄も見たし鶴鴿啄む庭
 しんしんとこの世の端に老いて雪
 ひからびた蛙掃き出すコンバイン
 穀象の鳴けば母来る山河かな
 春一番忘れる力湧くごとし
 自転車に空気を入れて風になる
 兄妹で素麺する七回忌
 叱られて見た夕焼けの赤い舌
 炎天に足場組み立て声交わす
 草むしり子草孫草エンドレス
 社交ダンスの苦い記憶や夜の秋
 わが膝の痛みに耐えて百日紅
 昭和の書捲り灯下の秋を読む
 河童の忌手庇てびさしで見よ日本海

186 185 184 153 182 181 180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162 161 160 159 158 157 156
 明日検査の体軀沈めて夜の秋
 軽トラが市道を急ぐ秋立つ日
 世界地図たためば終るパリ五輪
 積み損ねのオクラ頑かたくまでになる
 原爆忌川べりに座す孤独たち
 秋寂しアルバムめくる若き父母
 芒嚙む男に生れし寂しさに
 朝霧や九重連山一跨ぎ
 点点と生きた証の天の川
 原爆忌子どもらの詩未来へと
 点滴の落ちる速さで秋になる
 翠色の夜を転がる虫のこゑ
 大河行くごみに紛れて蟻の群れ
 夏落葉踏んで母また悲します
 枯すすき明日はあしたの風を待つ
 タラの芽や小さな刺が身を守る
 仏足の余白の余命賜る
 八十路とて勇氣りんりんサングラス
 ひまわりの真中に戦拡散す
 読み聞かす昼寝の座敷南風かすか
 政策の鉛筆書きや露時雨
 遠花火音追っかけて闇に入る
 私だつてときめきたいのよ秋の茄子
 露けしや写真の母はいつも端
 爆発すマグマ飛び出すトマトかな
 誉められて恥じらうて乙女秋の蝶
 父母をのせて飛交ふ赤トンボ
 実り成し列なす白菜採り急ぐ
 いずれかの鳥のないてる朝の雲
 だんだんと透きとおっていく秋の耳
 コスモスや倒れしままに咲きほこり

187 合鍵を残し空蟬消えしまま
 188 距離間をはかりて飛び立つ赤トンボ
 189 空蟬のすずなり昏い目の兵士
 190 秋深む短所に味も見え始む
 191 花野行く後ろ姿の侘しさや
 192 台風の目玉にテープ貼りつける
 193 原罪は等しく背中に遠花火
 194 長月の空き家にほつと灯が点る
 195 波間から珊瑚も照らす大夕焼け
 196 われら同輩霞の端で古希となる
 197 八月のいろよみがへる終戦日
 198 刈田風蒸れた男の匂いして
 199 先人の空石積みや秋耕す
 200 置かれた場所に咲くと決め落葉踏む
 201 ママチャリの背なに西日や登り坂

以上213句から10句選をお願いします

202 来し方を西日の中に置いて来る
 203 水脈の果て蟹かつかつと兜太の詩
 204 日蓮や事あるの日に御難餅
 205 片陰や吾の一步と母の二歩
 206 青春の蜜豆食べた街さびし
 207 ビル育つ空へ空へと秋暑の街
 208 ヨーイドン大歓声や秋高し
 209 大夕立噴煙を消し九重山(やま)を消し
 210 新しき庭下駄にかえ今朝の夏
 211 送り火や父母をかえして後の熾
 212 名月や言葉少なな夫といふ
 213 秋アカネちさき庭命灯し滑る

(以上)

◆右の第2回雑詠句会作品、213句の中から10句を(選句)し、その中の気になった1句に二百字程度の(選評)を書いてください。選評は短くても、長くても、または書かなくてもかまいません。

◆選句・選評には当協会の会員以外の方でも参加できます。当協会は俳句の多様性を尊重しています。なるべく多くのご意見をうかがうことが、私たちにとっての勉強であり同時に刺激です。ぜひ、選句・選評にご参加、ご指導くださるようお願いいたします。

◆選句は番号の若い順に並べてください。番号を順不同に書くこと事務局が間違ふ可能性が大きくなります。ただし、用紙を汚してまで書き直

す必要はありません。
 ◆作品番号だけでなく、間違いを防ぐために上五もお書きください。事務局を八年やっています。作品番号と上五が全員全句に渡って一致したことはほとんどありません。

◆当たり前前のことですがご自分の名前を書くこともお忘れなく。二、三回に一度くらいの確率で名前の記入のない人がいます。それで前回から同封の投句用紙の名前の位置を変えました。

◆選句・選評の締切は1月24日(金)です。13ページ「囲み記事」の「自薦作品」の投句締切日と同じです。

◆今回に限らず事務局は、できるだけ会員のみ皆さんの融通を利かせます。締切日を過ぎて

「しまった」と思ったときは、あきらめずに一度ご相談ください。印刷の都合で間に合わないときもあります。数週間の猶予があるときもあります。(これは事前に分かりません)

◆同封の選句用紙を使うと、どのコンビニのファックスでもほとんど50円で送れます。使い方が分からないときはコンビニにおたずねください。郵便の配達が遅くなり、郵便料金が大幅に値上げになった今では、コンビニのファックスの役割がますます大きくなっています。「安い」「速い」のコンビニファックスをぜひ一度使ってみてください。

◆自宅のファックスでも送信可能ですが、筋が入って読めなかったり、ローラーの吸い込みが悪く、簡単な原稿が二枚に及ぶことが多発しています。自宅FAXの調子が完全でないときは、一度、電気屋さんにご相談してみてください。案内簡単直るかもしれません。

◆ファックスで送る場合の一般的注意として、エンピツ等の字の薄いもの、カスレのあるものはお避けください。正確に受信出来ません。原稿はなるべく大きな字で濃くお書きください。百均で2本セットで買えるラッシュペンなどがおすすめです。

◆選評などで誤字脱字や読みにくい文字がたくさんあります。事務局では簡単にボツにせず何とか読み解こうとするため、五倍も十倍も時間がかかることとなります。「中学生でも判読できる原稿」にご協力ください。



作句から選句・選評について（事務局便り）

当協会には通信句会形式の内部の俳句勉強会があります。年二回の雑詠句会と自薦作品がこれに当たります。最近、新会員が大幅に増えてきていますので、この内部の勉強会を有効に活かしてもらおう観点から、いくつかの提言をしたいと思います。

●作句姿勢について

◇投句された全句とその得点が、自分の作品を含めて提示されているのですから、よく読んで作句の参考にしていきたいと思えます。高得点句が必ずしも良い作品とは限りませんが、選をした人はその作品に魅力を感じたから一票を投じた訳です。その魅力がどこなのかを探ってみることが、自身の作句にも役に立ちます。

◇難しい内容を扱った作品が共感されている訳ではありません。多くのこと、大きいことを言おうとすると、逆に共感は下がります。材料を少なくして、一つの思いをゆったり書くことを意識してください。

◇何回も投句しているのに、自分の作品にはさっぱり点が入らないと感じている方もいると思えます。点を取ることが目的ではありませんが、誰にも共感してもらえない書き方では、発表する意味が薄れてしまいます。

◇事務局の立場で多くの応募作品を見てみると、ちよつとした癖、ちよつとした言い回しで点を逃している作品がたくさんあります。作者は気づいていませんから何年も同じ失敗をしています。同じ材料でも料理の味は全く違います。

◇自分の作品の欠点は自分では気づかないものです。通常は句会の先輩等にアドバイスをもら

らうわけですが、そのチャンスのない方は事務局にお問い合わせください。事務局で答えられない場合は、必要な選者を紹介します。

●選句、選評について

◇初心者は「意味が分かる」作品を選ぶものです。それは当然のことですが、俳句は意味を伝える文学ではありません。ですから俳句が次第に分かってくると、表面に書かれたことからはなく、その背後に隠された精神の深さを味わって選が行われるようになります。俳句を続けていると自然にそうなってくる訳ですが、それを意識的に行えば、普通十年かかることが三年でできるようになります。

◇選評は俳句の技量を向上させる上でとても役に立ちます。きちんと作品が読み解けないと、一般的なふわつとしたことしか書けないからです。書いてある方向になら、読者の体験に基づいて、いくら深く読み進めても構いません。

◇反対に、作中の気に入った単語やフレーズを取り出し、それを読者の主張に沿って解釈する方法は正しい選評とは言えません。ある程度長い選評を書かないと、自分の選評の間違いが分からないものです。「お母様はやさしい方だったんですね。その気持ちよく分かります。共感しました」というような評では、作品を読み解

いたとは言えません。

◇俳句は「詩」ですので、現実とは違う動きをします。「空から落ちる」ではなく「空へ落ちる」こともありますし、「鞆に春を閉じ込める」ことだってできます。「昭和の母に会ってくる」などはいつも行われています。詩は精神ですから、常識では判断できません。内容を常識に従って判断することは、日常生活では有益でも、詩では絶対にしてはならないことです。

◇従って、「俳句を書かれている通りに読む」とは、どんなに理屈に合わなくとも、書かれている文法通りに読むということです。短い俳句にあつて、文法は不要、または無理という専門家もいますが、それは誤りです。短くて言葉の象徴性が高い文学であるからこそ、常識ではなく文法に従って読むことが必要になるのです。

◇当協会でもよく見られるのですが「枯野来て……」という作品があると、無条件に「枯野に（私が）来て……」と解釈する人がいるのですが、変と思いませんか？ 普通「○○来て」と書くと○○が来てと解釈するのが普通です。「人来て大根煮きはじむ（下村槐太）」のように、この場合の○○は「人」です。「太郎来て」なら「太郎が来て」です。

◇ところが「枯野来て」は「枯野が来て」ではなくて「枯野に来て」と無理な解釈をさせます。こんなことを続けていたら、たくさんの方の文学好きの国民から俳句を遠ざけることになってしまいます。不必要に敷居を高くします。これまでたくさんの方の有名俳人が無自覚のままこんな書き方をしてきたので、その習慣が身についた人が多いでしょうが、改めていきたいものです。



大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村王志



《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL:<http://www.gendaihaiku.net>

E-Mail: info@gendaihaiku.net